平成27年度　学校経営研修会報告書

1.　研修目標：　「こころざしを高める私学教育

　―社会環境の変化に対応する学校経営－」

2.　期　　日：　平成27年6月25日（木）・26日（金）

3.　場　　所：　熱海市　ホテルニューアカオ　ロイヤルウィング

4.　参加者　：　48名

5.　日　　程：

　6月26日 12:45～13:00　受付

13:00～13:10　開会式

13:15～14:45　講演「私立学校の差別化-戦後の歴史観の転換-」

岡山県私学協会　会長

学校法人　森教育学園　理事長　森　靖喜氏

　　　　　　　15:10～17:10 分科会

　　　　　　　　　　　　　　「公私立高等学校の生徒収容について」

　　　　　　　　　　　　　　「中学校との進路相談について」

　　　　　　　18:10～20:10　夕食懇親会

　6月27日 7:00～ 9:00　朝食

9:00～11:30　講演「学校経営における危機管理」

九段富士見法律事務所　弁護士　堀切　忠和氏

11:45～　　　昼食後解散

１・講演　「私立学校の『差別化』‐戦後の歴史観の転換」

岡山県私学協会　会長

学校法人　森教育学園　理事長　森　靖喜氏

(1)私立学校の存在意義

　私立学校の恩恵は、私学は大きな可能性を持つ。価値観教育、宗教教育が可能であり、公立学校との差別化が図れる。学芸館では親学講座で、学園、親、教師、郷土の一体感を醸成する。

(2)私学の役割の変化

　公立補完の「収容」から独自の価値観教育への転換にある。本学は人間教育、倫理道徳教育で、知識技能は末学。保守的教育観では管理、系統的学習、訓練（強制）だが、シカゴ大学のデューイによれば子供中心主義の進歩主義的教育観では子供の本性を自由に発展、教師は管理者ではなく援助者、学習動機は子供の興味関心として、昭和50年代後半から日本でもゆとり教育の流れになった。詰め込み教育が非行の原因、管理反対の学園紛争の原因とされたが、教えない、管理しない、学力低下を招いて教育は堕落した。失敗と言える。

(3)最大の差別化のツール

保守的教育観への転換を阻む最大の根拠は、太平洋戦争を全て悪とする歴史観にある。あの戦争を侵略戦争とした始まりは極東軍事裁判にあった。米国主導の東京裁判を引き継いだ日本の多数派マスコミ、一部政治家、学者が戦後のアメリカの教育改革を正義として、戦前の全否定路線を敷き詰めた。しかし、マッカーサー証言やアムステルダム市長証言では自衛のための戦争だったとされている。戦前の全否定ではなく、日本が本来持っていた価値観や独立心に気づき、日本ならではの価値観を再発見する保守的教育観が必要。それは神道の清明な心、仏教の慈悲の心、儒教の礼儀であり、日本精神といえるもので、日本文明の源泉となっていた。

(4)日本近代史の学び直し

日本の歴史教育の決定的な欠陥は20世紀にいたるまでの西力東斬と人種差別の視点が欠けていること。同じ植民政策でも、欧米型の虐殺略奪収奪型と日本は全く違った投資型政策だった。

(5)19世紀後半の日本

日本の植民地化への危機、風前の灯だった。政治制度、産業政策、教育政策等全てを近代化し有色人種唯一の近代国家へ向かった。欧米ロの帝国主義に帝国主義で向き合ったのが明治大正昭和だった。

（6）大東亜戦争の原因

長期的には西力東斬と人種差別への抵抗にあった。短期的にはアメリカの中国進出と日本の締め出し政策だった。その意味で「祖国防衛戦争」の証言があった。

２・分科会

「公私立高等学校の生徒収容について」、「中学校との進路相談について」について、3分科会に分かれて意見交換を行った。内容については、非公開。

３． 講演「学校経営における危機管理」

九段富士見法律事務所　弁護士　堀切　忠和氏

(1)学校危機管理の基本的視座

①教員目線ではなく法的観点が出発点

「子供のために学校は何をすべきか」、「最低限何をしなければいけないか」が法的義務。「やれたことがあったのではないか」の発想が必要で、学校としてのミニマムとの認識ギャップに問題が生じる。

②教育にリスクはつきもの、小さな危険と大きな安全

痛い思いを繰り返した者の方が大きな危険を感じやすい。リテラシーの低さが大きな危険を招く。大人がコントロール可能な範囲で、子供を危険に接触させる必要がある。

③事故は不可避、保険加入が不可欠

（記録文責：藤枝学園　仲田）